

福井市社協、地域福祉活動計画づくりに子どもも参加

中学生も 地域の一員！



執筆 ▶ 水上 聰子 ◉ アルマス・バイオコスモス研究所代表

福井市社会福祉協議会では、地域福祉活動計画策定のため、住民参加によるワークショップのほか、中学校でもワークショップを開き、子どもたちと「地域福祉」について考える授業を行っています。その取り組みの裏には、将来自立した大人となるために子どもの時から考える力を育むという「シティズンシップ教育」の仕掛けがあるそうです。ファシリテーターを務めている水上聰子さんに、寄稿をしていただきました。

(編集部)



みずかみ さとこ
1987年津田塾大学国際関係学科卒業。様々な行政計画を支援するコンサルティング業務の他、ファシリテーターとして、市民を対象とした各種まちづくりや医療福祉施設の職員研修ワークショップを企画運営する。現在、福井大学大学院博士後期課程に在籍し、シティズンシップ教育を研究中。福井県在住

初めて考える地域福祉

「目を閉じてみましょう。皆さんにとって、地域とは、どんなところですか？地域の方々を思い浮かべてみて下さい。今までお世話になったことは、どんなことですか？皆さんにとっての地域を色で表すとしたら何色…？」

福井市内にあるA中学校の5時間目。30人の生徒が、グループごとに分かれて、目を閉じている。中には薄目を開けて周りを伺う生徒もいるが、それぞれに考えている様子。「さあ、それでは目を開けて、自分が思い浮かべた色を選んで、紙に貼ってみましょう」合図とともに、生徒たちは、目の前にある折紙から1枚をとり、シートに貼って、その色を選んだ理由を書く。そして、全員で輪になって見せ合いっこだ。

「私は、水色です。さわやかな感じ。あいさつをすると、笑顔で返してくれるからです」「オレンジ。近所の人は、野菜とか持ってきてくれて、温かいです」「赤です。親切にしてくれるおばさんが、赤い服を着ていたから」「黄色です。地域の人どうし仲が良くて、元気だからです」

照れくさそうにしながらも、少しずつ説明をしてくれる生徒たち。しかし、シートを裏返しにして、見せてくれない子もいる。「他の色を選んだ人はいませんか？いたら、教えてください」と声をかけると、別の生徒が、誰かを指さして、そっち、そっちと合図する。言いたくない様子だが、発言を応援すると、「分からないから、白です」との答え。別の子は、「黒です。無だから」。また別の子は、折紙の

「“地域”を色で表すと何色？」
の問いかけに、それぞれ色紙を選ぶ子どもたち

まず全クラス合同で集まつてもらい、「子ども市民」という概念を伝える



台紙となっているグレーの厚紙を貼っていた。「窓から見える地域は、コンクリートのイメージだから…」

「なるほど！素晴らしい意見をどうもありがとうございます。今日は、皆で地域福祉のことを考えるワークショップです。白や黒やグレーの説明は、とても大切なことを教えてくれました。皆さんのが地域とどんなかかわりをしていくのか、これから一緒に考えていきましょう」。そして本題のワークが始まった。

福井市社協の取り組み

福井市社会福祉協議会では、「地域福祉活動計画」の策定にあたり、市内49カ所の地区社協ごとに、地域住民のワークショップ（以下、WS）と23校ある中学校で子どもたちのWSを順番に開催している。大人のWSを終えて、それをもとに中学生WSを開き、その結果を再び大人WSにフィードバックするという方法だ。中学生WSには、スタッフ以外に、地域の方々が数名ずつクラスに分かれて入る。2009年度には、11校で開催された。福井県子どもNPOセンターが運営協力しており、社協スタッフ、NPOスタッフなど約10名のファシリテーターが各クラスを担当している。

なぜ中学生が計画づくりに参画するのか？

昨今、世界のあちこちで、「シティズンシップ教育」が広がってきている。社会への関心が低く、個人を優先する



模造紙を囲んで、熱心に意見を貼り出すグループワーク

風潮が高まる現代社会の中で、若者たちの政治離れや社会の一員としての行動力の減退など、様々な背景がある。

シティズンシップとは、「市民性」という意味。一人ひとりの市民が、社会の一員としての自覚を持ち、責任ある行動や主体的なかかわりを持つことの出来る力を備えることで、自立した市民の集合体による豊かな社会が出来上がる。そのための教育をシティズンシップ教育という。自己を確立するとともに、他者の人権を尊重し、お互いが思いやりたり、助け合ったりすることの出来る社会である。また、シティズンシップ力があれば、社会の諸問題に対して主体的に考え、行動を起こすことも出来る。

筆者が、シティズンシップ教育研究の一環で訪問した北欧フィンランドの教育現場では、民主主義社会を担う自立した市民を育むために、熱心な取り組みが展開されていた。「競争しないのに国際学力世界一」で有名になったフィンランドの成功の秘訣は、こうした教育理念と実践にあると考える。

例えば、中学生の社会科の教科書では、地域の計画づくりに参画することの意義、方法、そして、意見がすぐに通らなくても決してあきらめないことなどが書かれている。また、地域開発に関する例題をあげ、行政、開発者、地域住民、その他さまざまな人々の役を演じながらクラスで話し合いをするプログラムが紹介されていた。こうしたワークを子どもの頃から体験していくことで、社会に対する関心を育て、考え、発言し、行動出来る力を育んでいく。知識集約型の教育とは異なる。

「子ども市民」をめざして

普段から地域や福祉と接点の少ない子どもたちにとって、なぜ自分たちがこの問題に取り組まなければならないのか、動機づけは簡単ではない。「関係ないんじゃないかな?」



グループワークの合間に、スタッフや地域の人方が子どもたちに声をかける

という心情も伝わってくる。

今回の一連の中学生WSでは、まず全クラス合同で体育館に集まってもらい、私たちが大切にしている「子ども市民」という概念を伝える。「皆さん、まだ投票権はないけれど、社会の一員であり、市民です。自分たちが住んでいるまちのこと、社会のことについて、これでいいのだろうか?どうしたらよいのだろう?ということを考え、それを大人に伝えることが出来るし、子どもの目から見て、もっとこうしたい! ということがあつたら、積極的に提案することも出来ます。皆さん、近い将来、大人になって、社会を担っていきます。この計画が目指している10年後のまちを想像してみて下さい。どんなまちになっていて欲しいですか?」

「地域福祉って何でしょう? 福祉って、障害のある方や高齢者ことで、自分とは関係ないと思いますか。でも、考えてみて下さい。人は誰もが必ず年をとります。また、今元気でも、いつ病気やケガで体や心が不自由になるかもしれません。それに、毎日がハッピーで何も悩みがないという人はいるでしょうか。悩んでいる人が身近にいるかもしれません。お互いに、思いやりを持って生活するということは、実は、皆さん自身のとても身近なテーマです」

そして、福井市の高齢化の現状をはじめ、地域福祉がなぜ重要なのか、住み慣れた地域で誰もが安心して暮らせるために、何が必要かなど、問題提起する。

次に、WS参加のルールとして、シンプルな二つを掲げる。一つ目は、自分が感じたこと考えたことを正直に堂々と話すこと。立派な意見じゃないとダメとか、「こんなこと言ったら変かな?」と思わず、積極的に意見を言うこと。二つ目は、人の意見を尊重し、自分と違う考え方や意見を受け入れること。答えは決して一つではなく、多様性の中に豊かさがあること。どちらも、シティズンシップ力を育む上でとても重要である。

実際に考えてみると…

さて、いよいよクラスでのワークが始まった。グループに分かれて取り組むテーマは、5つ。①人と人が、お互いに関心を持ち、理解し合う②家族の一人一人が、家庭の素晴らしさを感じること③地域の一人ひとりが、参加し、つながり、支え合うこと④誰もが、住み慣れた地域でいきいきと暮らす⑤誰もが、いつも、安全で安心して暮らす

それぞれのテーマごとに、前半は「現状と課題」、後半は「これから出来出来ること、していきたいこと」について大きな模造紙に意見を出し合っていく。しかし、意見が出せずに困っている子、隣とふざけ合う子もいる。そこで、地域の大人やスタッフがそっと声をかけながら進む。少しの問い合わせをすることで、子どもたちの表情が変わっていく。「そういうえば、地域に認知症のような人がいるけれど、自覚していないみたい」という意見も出れば、「後遺症の人が住んでいるけれど話したことがない」という意見も出てきた。

しかし、基本的には、地域にどんな人がいて、どのような問題を抱えているのか知らないことばかり。地区社協役員の方から、「この中学校区には、見守り活動の対象になつておられる方は200人位います」という話を聞いて、子どもたちは驚いた様子。「いざというとき、どうすればよいですか?」と問いかけると、「110番に電話すればいい!」という答えが返ってきた。ここでまず、この意見を否定せずに受け止めた上で、地域福祉の話をする。日々の暮らしの中での助け合い、心の通い合いの大切さについて、皆で考える。

対話の構築

さあ、いよいよ発表の時間だ。誰がどのように発表を担当するのか、子どもたちに任せて様子を見ていると、早い者勝ちで選んだり、男女で分けたり、じゃんけんをしたりしている。ここでも、シティズンシップの学びのチャンス。「意見を強く言える人や先に主張出来る人が得をするのではなく、民主的に役割を分担していくにはどうすればよいか?」と投げかけると、しばらくして「話し合いが大事…」との答えが返ってきてホッとした。

そして始まった発表。ファシリテーターが大切にしていることは、子どもたちの意見をとにかく受け止めること、意見を出しづらなしに終わらせず、感じたことを返していく。地域の大人の皆さんからも感想を出していただく。こうした「対話」を通して意見を受け止めしていくことで、子どもたちの自

信が芽生えてくる。主体性を育むポイントはここにある。

子どもたちの成長

子どもたちの学びは、「ふりかえりシート」から確実に読み取ることが出来る。

「身近なことについて、こんなにいっぱい考えられることを知った」「改めて、地域の人たちがどんなに大切か、ありがたさがわかった」「感謝の気持ちが前より強くなったり、これからは親切にしようと思った」

「地域の人と仲良くしたり、助け合ったりするのは大事だと知った」「人を思う気持ちが強くなった」「困っている人がいたら、声をかけたり、話し相手をしたい」「地区で何か決める時は、今日みたいに、みんなの意見を取り入れたい」「もっと地域のために、私が出来ることがないかなと考えるようになった」

「人ととの交流を大切にしていくことについて考えていきたい」「地域全員で清掃活動に取り組み、地域をピカピカにしたい」「近所の人に積極的にあいさつしようと思う」「みんなで助け合って生きていこうと思った」

これらのことばは、ワークをしながら聞いかけることで、泉のように子どもたちの心の中から湧きあがってきた。周りの大人の接し方や教育のあり方次第で、しっかり感じることが出来るし、考え、発言することが出来る。

学びをどうつなげていけるか

今回の一連の取り組みは、一校につき2コマの授業にすぎない。問題提起、話し合い、そしてふりかえりまで短い時間である。しかし、大変身近であるにも関わらず、日頃ほとんど縁のない地域福祉という問題に触れ、感じ、考えるには、とても貴重な第一歩となっている。

今回の学習を通して、地域とは何か、福祉とは何か、自分はどうかかかわっていけるのか、自分がもし支援の必要な立場になったらどうしたいのかなど主体的に考え、発言する力が育っていくことを期待している。

現在、福井市社会福祉協議会では、地域住民のWSと中学生WSで出された意見をもとに、策定委員会を開催し、計画を練り上げている。自分たちが出した意見が、どのように反映され、これからまちづくりにどう役立っていくのか、子どもたちにフィードバックされることを願っている。